



シンカシセシヌコイカタイアイヌ/シヤノソ様
コアシメイト無配ボエム折本「アイヌと家出少女たち」

いつか夢見るにてもかなしい。

[illegible]

まだ何か変わるかもしれないという希望を捨てきれなかつた。

「……」

タマは心の中でそう呟き、少しだけ寂しさを感じた。あの頃の楽しかったやうに、家族の距離感を失ってしまったから、彼女は今では遠いところにいるかと思える。

「……」

かいた。混

[illegible]

妹は、まだ市民のうやうやの東京の一部を抜け、電車に乗に、そのそれの、さび、つや、や、東、京、駅、に、到、着、し、た。新線が、着、す、す、の、道、の、り、り、は、長、く、疲、

「こゝに、人などいない。早いな、と、人少しもないね。」

「ア、キエが周囲を見渡しながら言つていた。今、新宿は静けさの中、哀愁が漂ひつゝ寂しいね。」

「ア、この時間、新宿の静けさ、なんだから。」

「チロロが、静かな光景に少し驚いた様で言つた。まるで別世界に来たかのようだ。」

「うう、彼女たちはその空気を感づいてゐた。彼女たちは、空気に取つかれてゐた。」

「電車に乗る。東京駅まで行くかといふね。」

「コロンコロンの音が肩を荷ぐ物を掛け、二人を促すやうな歩み出した。三三、荷物を抱へ、姉さん、疲れた顔をしてゐたが、確かに東京に來たといふ実感をかもしめてゐた。三姉さん。」

夜行バスの車窓から見える光景は、どこか懐かしいものであった。昭和の頃に建てられた古びた工場の煙突や、商店街のシャッターが閉まったままの建物が、街灯に照らされてぼんやりと浮かび上がる。かつて高度経済成長期を支えたこれらの町並みは、今では静かに時間の流れに埋もれていた。そんな風景が続く中、三姉妹は小さなため息を漏らし、肩を寄せ合って座っていた。

「新幹線、乗りたかったよね…」

末っ子のチヒロが窓の外を見ながら呟いた。彼女たちは新幹線に特別な思いを抱いていた。特にチヒロは、その速さや美しい車体に憧れていた。家出の前に家族で一度乗ったことがあったが、その時食べたすごく硬いアイスの記憶が今も鮮明に残っている。今回は節約のために夜行バスを選んだ。新幹線に乗ることが夢だった三人にとって、これは妥協でしかなかった。

「でも、私たちにはこれが精一杯だよ。節約しないと、東京までのお金だつてギリ

「ギリなんだから。」

次女のタマキが現実的な声で言った。タマキもまた、新幹線のアイスが硬すぎてスプーンが曲がりそうになったことを覚えていた。彼女たちは母親との不和に悩み、家を出ることを決意した。ココロは冷静に計画を立て、タマキと末っ子のチヒロを連れて夜行バスに乗ることにしたのだ。

「いつか、新幹線でゆつくり旅できる日が来るよ。」

運転手の休憩フナウンスがかすかに聞こえる中、長女のココロは軽く肩をすくめる。彼女は少し大人びた考えを持っていた。まだ小学生だが、時折驚くほど落ち着いた言葉を口にするのがあり、妹たちを励ます役割を果たしていた。それぞれの心にわたかまるものがあったが、この旅が終わったらどうするのかは、まだ誰も答えを出していなかった。

「東京に着いたら、まずどこ行く？」

タマキが半ば寝ぼけながら尋ねる。

「とりあえず、新宿駅で降ろされるらしいよ。東京駅までは電車だね。」

ココロがスマホで調べた情報を元に答える。新幹線なら一気に東京駅に到着できるのに、夜行バスはそうはいかない。それでも、彼女たちには贅沢を言える余裕はなかった。

「お金、どれくらい残ってる？」

チヒロが現実的な質問を投げかける。

「うーん、たぶん電車賃は大丈夫だけど……東京駅に着いたらおばあちゃんが迎えに来てくれるって言ってたから、心配しなくていいかも。」

おばちゃんは優しい人だった。事情を全て話してはいなかったが、久しぶりに会えるという安心感が、少しでも彼女たちの心を軽くしていた。

•
•
•

バスはやがて、広がる田園風景を抜け、遠くにビル群が見え始める。昭和の名残を感じさせる工場や、朽ちかけた商店街の姿が、まるで滅びの中から何かを蘇らせようとしているかのように見えた。滅ばされざる首都東京に思い馳せるが儘に、三姉妹は窓の外に目を奪われていた。

「着いた……！」

タマキが小声でつぶやく。ようやくバスが新宿駅に到着したのだ。夜明け前の新宿駅に到着したとき、三姉妹は疲れ切っていた。バスを降りた瞬間、肌寒い朝の空気が彼女たちを迎えた。まだ薄暗い空の下、駅前の広場には人影もまばらだったが、ちらほらと酔いつぶれたサラリーマンがベンチでうずくまり、疲れた顔をした夜の世界のお姉さんたちが足早に帰路についていた。ビル群が天高くそびえ立ち、都会特有の冷たい空気が三人の眠気を吹き飛ばす。